

# 第一の世界 一幕

人

山中慎一

學者

山中敏子

その娘

島村國雄

孤兒

谷村龍太郎

實業家

谷村系子

その妻

新聞記者 A

新聞記者 B

新聞記者 C

新聞記者 D

小山内薫

時

現代

所

東京の郊外

舞臺 或室内。

(敏子、鶏を追つてゐる。)

敏子　しやうがないねえ。又はひつて来て。しつ、しつ、しつ。

(人の音なふ聲。)

(やがて、島村、名刺を持つて、はひつて来る。)

島村　お嬢さん。太陽新聞の記者といふのが来ました。

敏子　お父さんに會ひたいと言ふんだらう。

島村　さうです。

敏子　お留守だと言つたかい。

島村 言ひました。でも、お留守は承知だと言ふのです。お歸りを待つて、お話が承<sup>うけたまは</sup>りたいのだと言ふのです。

敏子 一つお歸りになるか分からないと言へば好いぢやないか。

島村 さうも言つたのです。でも、大使館へ入らつしやるのが二時だから、もう追つつけお歸りになる筈だと言ふのです。

敏子 (やつと鶏を追ひ出す)よく知つてるんだねえ。

島村 そりやあ知つてますとも。東京では大評判です。新聞などでも盛に書き立ててゐますから。

敏子 おや。お前、新聞を讚むのかい。

島村 ええ。毎朝、卵の荷を出しに行く時、ステエションの前の萬松軒で讀んでます。

敏子 お父さんに叱られるよ。

島村 いいえ、先生は決して他人のする事に干渉をなさる方ではありません。人間はひとりびとりで自分自分の道を歩くべきものだど、始終さう仰しやるのです。新聞を讀まないのは、先生の主義です。新聞を讚んでも構はないといふのが、僕の主義です。

敏子 お前の主義なんかどうでも好いよ。それよりお歸りになつたつて、とてもお會ひになりやしないんだから、早く斷<sup>ことわ</sup>つて返しておしまひよ。

島村 斷るんですか。

敏子 返しておしまひよ。

島村 はあ。

(島村、退場。)

(敏子、小さい紙片に鉛筆で何か書き始める。)

(島村、登場。)

島村 歸りました。

敏子 (紙片を隠す) 歸ったかい。

島村 何を書いてゐたのです。

敏子 學校の作文よ。

島村 嘘をお言ひなさい。手紙でせう。

敏子 手紙だつて好いぢやないか。

島村 いけません。又あの谷村といふ大學生のところへ出すんでせう。先生が一寸でも留守だと、直ぐそれだ。

敏子 他人の事に干渉するものぢやないよ。お前は先生の弟子ぢやないか。

島村 僕はあなたを他人だとは思ひません。

敏子 又はじめた。それはお前がひとりできめた事ぢやないか。あたしの知つた事ぢやないよ。  
づうづうしい。

島村 いくらあなたが威張<sup>いば</sup>つても、これは人間以上の者のきめた事です。動かす事は出来ませ  
ん。

敏子 お前なんか神様のお心が分かつて堪るものか。

島村 僕は他の人の持つてゐない力を持つてゐるのです。他界との交通が出来るのです。

敏子 透視や念寫ぐらゐのが出来たつて、それが何だい。あたしから見れば、一種の不具だよ。  
お父さんも物好きねえ。お前のやうな者をわざわざ孤兒院から拾つて来て、まるで自分  
の子かなんぞのやうに可愛がつて入らつしやるんだ。

島村 まあ何とても仰しやい。今に分かりますから。

(人の音なふ聲。)

島村 また誰か来たな。

敏子 早くお出でよ。

(島村、退場。)

(敏子、手紙を書き続ける。)

(島村、登場。)

島村 また新聞記者です。

敏子 他ほかのかい。

島村 今度は毎朝新聞です。

敏子 断つたのかい。

島村 いいえ。

敏子 なぜ断らないの。

島村 でも、折角遠くから来たんですから。

敏子 それは爲方がないぢやないか。こつちで呼んだわけぢやないんだから。

島村 でも、けふは先生の生涯にとっては或偉大な日なのですからね。先生の名が世界的に知れるといふ日ですからね。新聞記者として、會つて話が聞きたいのは當り前だと思ひます。

敏子 大層新聞記者に同情があるんだねえ。

島村 先生だつて少しは世間的になるのが好いのです。

敏子 でも、とてもお會ひになりやしないよ。

島村 さうでせうか。

敏子 さうだとも。早く断つて歸つてお貰ひよ。

島村 はあ。

(島村、退場。)

(敏子、手紙を書き終り、封筒へ入れて、宛名を書く。)

(島村、登場。)

島村 歸りました。

敏子 ぢやあ、好いから、鳥小屋を見ておくれ。

島村 少しゐても好いでせう。こんな機會はめつたにないんです。それに、けふはおめでたい日なんです。

敏子 でも、あたしは少し考へ事があるんだから。

島村 それも、あの谷村の事でせう。あなたが東京の學校へ行く電車の中で、毎日どんな事をしてゐるか、僕はちやんと透視してゐるのです。

敏子 嘘お言ひよ。

島村 好い男だ。生なまつ白しろいが、ああいふのが女の好い男と言ふのでせう。だが、目が近いと見え

て大分強度の近眼鏡をかけてゐますね。

敏子 誰かに聞いたんだね。

島村 知らないと思つてるから氣の毒です。先生に言ひませうか。

敏子 言つたつて好い。あたしは感情を偽つてはゐないのだから。

島村 いいえ、偽つてゐます。あなたは僕を愛してゐながら、自分でそれに氣がつかずにゐるのです。そして、愛してもゐない他の男を、愛してゐると思つてゐるのです。

(人の音なふ聲。)

敏子 また誰か來たよ。

島村 うるさいな。

(島村、退場。)

(敏子、手紙を帯の間に入れる。)

(島村、登場。)

島村 また來ました。帝都日報の記者で、今度は二人です。一人は寫眞機を持つてゐます。



敏子 断つたんだらうね。

島村 断りましたが、歸りません。お嬢さんにも好いから會ひたいと言ふのです。

敏子 あたしに會つたつて、しやうがないぢやないか。

島村 僕もさう思ひますが、先生のふだんの事でも開きたいんでせう。

敏子 そんなら、お前が話してやれば好いぢやないか。

島村 そう言つたんですが、僕ではだめだと言ふんです。先生の子だといふだけで、世間に對してはお嬢さんの方が權威があるんですね。

敏子 くだらない事を言つてゐないで、早く断つて歸しておしまひよ。

島村 あなた會ひませんか。

敏子 厭やよ。新聞記者なんか。

(島村、退場。)

(敏子、懐から或寫眞を出して眺める。)

(島村、登場。)

(敏子、寫眞を隠す。)

島村 だめです。歸りません。

敏子　しやうがないね。

島村　お歸り迄玄關で待つてゐると言ふのです。

敏子　ぢやあ、うつちやつてお置きよ。あの玄關は内の入口ぢやないんだから。

島村　ですから、その儘にして置きました。

(間。)

島村　併し、お嬢さん。一體、世間と隔絶するなんて事が實際に出来るでせうか。ほんとに世間

と隔絶するなら、山ん中へでも隠れるか、離れ島へでも逃げて行かなければだめだと思ひます。世間といふものの中に住んでゐて、世間と隔絶するなんて、到底不可能な事だと思ひます。

敏子　それはあたしもさう思ふのさ。でも、お父さんは「心」の孤獨といふ事を仰しやるのだよ。

島村　でも、本を読むといふ事が、既に「心」の孤獨を裏切つてゐるぢやありませんか。本を読む事は、大勢の人の思想に接する事です。

敏子　さうだとも。あたしはそれでなくても、お父さんが何處の大學から迎ひに来て、決してお出にならないのが齒痒はがゆくてならないんだよ。さうすりやあ、何もこんな、鶏なぞを

飼つて、苦しい生活をなさらなくたつて済むんぢやないか。本だつて心配なしに買へるし。

島村

博士號だつて、もう二度も斷つてゐらつしやるんです。先生が博士になつて帝大の講壇にでも立つてくれると、僕だつてその研究材料になつて、天下に名を廣める事が出来るんだけれど。

敏子

一體お父さんの研究して入らつしやる事がまるであたし達には用のないものに思へるよ。夢だとか、幻影だとか、精靈視だとか、有機磁氣の豫言だとか、それがあたし達の現在の生活に何の關係があるんだらう。

島村

いや、それは違ひます。先生の研究してゐらつしやる事は立派な事です。人間の生活にとつて極めて重要な事です。「第二の世界」の存在を確立する事は、この苦しい「第一の世界」に住む人類にとつて、どんなに深い慰めになるか分かりません。

敏子

でも、お父さんは、それを人の爲にやつてゐらつしやるやうには見えないぢやないか。

島村

それです。僕の言ふのもそこです。それ程人生的に意義のある研究をも、たかだか年に一度か二度、外國の文章で書いて外國の雑誌へ送る位な事で、自分の周圍の人には少しも頒<sup>わ</sup>けてやらうとなさらないのです。僕には先生のそのお心が分かりかねるのです。

敏子

お父さんは若い時に、何か苦<sup>にが</sup>い經驗をお嘗めなすつたに違ひないよ。

島村

僕は亡くなられたあなたのお母さんとの間に、何か不幸な事があつたのだと思つてゐま

す。

敏子 それは分からない。あたしが物心がついた時には、もうお母さんはゐらつしやらなかつ

たのだし、お父さんは何一つお母さんの事は仰しやらないのだから。でも、合はなかつたといふ噂はあたしが預けられてゐた家うちでも聞いたよ。

島村 さうです。きつとさうに違ひありません。でも、それ程な深傷ふかてを負つて、世間といふもの

からまるで離れてゐた先生が、けふ急に世間へ出て行く氣になつたのは不思議ですね。

伊太利イタリ大使館から手紙が來ると、直ぐ行つて見ようと仰しやつたぢやありませんか。嬉しかつたのでせうか。

敏子 分からないわ、あんまり嬉しさうな顔もなさらなかつた。唯、相手が外國人だからね、と仰しやつただけだよ。

島村 どうも先生の心持は、僕には分かりません。

敏子 あたしにも分からないよ。

(間。)

島村 僕は先生の側にゐるのが少し不安になつて來ました。僕は先生の實驗で、自分が他の人の持つてゐない力を持つてゐる事が分かつたんです。ですから、早く獨立して、これを

元に何か爲事がしたいと思ひます。あなただつて、この不自然な寂しい生活には飽き飽きしてるのでせう。二人で逃げませうか。

敏子　またそんな突飛な事を。何といふづうづうしい人だらう。

島村　づうづうしいんではありません。信ずる所があるから、さう言ふんです。谷村なんて、あんななんにも分らない大學生と一緒になつたつて、あなたの將來に幸福は來ません。

それは僕の未來の透視で、ちやんと分かるのです。失敬な事をお言ひでない。いつまで大學生で入らつしやるものか。谷村さんはきつとあたしを幸福にして下さる方だ。

敏子　さつきの手紙はどうしました。

島村　どうしたつて好いよ。

敏子　お出しなさい。その帶の間に挟まつてゐます。

島村　お前に渡すわけではないよ。

敏子　いいえ。僕はあなたの心の主人です。お出しなさい。

島村　厭だ。

敏子　よし。そんなら透視で、手紙の内容を讀んでしまふから。

島村

（島村、或姿勢をする。）

(敏子、逃げてはひる。)

(主人、山中慎一、新聞記者四人を連れて登場。)

主人 さあ、諸君どうぞかけてくれ給へ。裏口などから通して失敬だったが、あの玄關は使つ

た事がないものだから。椅子が足りないな。宜よろしい。僕はこの箱にかけるから。どうか遠慮しないでかけてくれ給へ。(島村を見る)何をぼんやりしてるのだ。諸君には俺があやまつて置いたから好い。お前のした事に罪はないのだ。俺がけふは流儀を變へたのだ。

記者B やあ、君。さつきは失敬した。太陽子たいやうしとステエションで落ち合つて、待つてゐたら、先生が歸つて來られて、直ぐ一緒に案内して下すつたのだ。吾々も意外だった。君も意外だらう。

記者C 僕も玄關で待伏まちぶせしてゐたんだが、何の交渉もなしに内へ入れて下すつたんで、ちと力負けの形だ。

記者A 先生はもつと圭角のある方かと思つてゐたら、意外に温情のある方なので、恐縮した。

主人 いや、自分の事は自分にも分かるものではありません。いつもはどんな人にも顔を合せるといふ事が億劫おくくじなのに、けふは不思議と誰の顔を見ても話がしたいやうな氣がするのです。

記者B いや。これ程の名譽を得られれば、どんな偉い方でも、さういふ心持になるのが當り前

主人 　　です。さうならなければ人間ではありません。

主人 　　君の言ふ通りかも知れません。併し或は君の言ふ通りでないかも知れません。世間で言ふ學問上の名譽といふやうな事なら、決してこれが始めではありません。だが、今までさういふものは大抵こつちから逃げて受けませんでした。ところが、どうしたのか、けふはこつちから出て行く氣になつたのです。(島村を見る)おい、まだぼんやりしてるな。お客様に番茶でも持つて來い。敏子はどうした。

島村 　　あちらに入らつしやいます。

主人 　　敏子にもあとで來いと言つてくれ。

(島村、退場。)

主人 　　客といふものに接した事のない男ですから、どうして好いか分からないのです。

(新聞記者A、B、C、各衣兜かくしから手帳を取り出す。)

記者A 　　ところで、先生、今回の御名譽に就いて、少しお話が承りたいのですが。

記者C 　　私からも願ひします。

記者 B 私からも。

主人 どういふ話をすれば好いのです。

記者 A 世間では色々に傳へてゐますが、どうも本當の事が分かりません。一體、先生は何の御研究で、今度のやうな名譽を得られたのです。

記者 B さうだ。僕も先づそれから伺ひたいと思つてゐたのだ。

主人 それは極めて簡単です。發表したのはダンテの研究です。

記者 A 詩聖ダンテですな。

記者 C (Aに) 何だい。シセイダンテと言ふのは。

記者 A (Cに) 伊太利の有名な詩人だよ。詩の聖人だよ。

記者 C ああ、さうか。

記者 B ダンテと言ふと、やはり「神曲」の御研究ですか。

主人 さうです。併し、その極一小部分の研究です。

記者 A それが、あちらで認められたわけですね。

主人 さうです。ほんの小さな論文を伊太利の或大學の雜誌へ寄稿したのです。それが向うの學士院といったやうなもの目について、今後の研究の足しにでもしろと言ふので、日本の金で三千圓程くれたのです。實はけふ先方へ行つて、私はダンテを専門に研究する者ではないからと斷つたのですが、それはどうでも好いからといふ事なので、兎に角賞



つて來ました。名譽といふ程の事でもないのです。

記者 B 別に儀式があつたわけでもないのですか。

主人 郵便屋へ爲替かはせを受け取りに行つたやうなものです。大使にも會ひましたが、ほんのふだん著で私を自分の居間へ通してくれました。禮儀だと思つて、二十年も著ずにゐた、こんな古ぼけたフロックを著て行つた自分が恥づかしくなりました。

記者 C その論文といふのは、やつぱり伊太利語でお書きになつたのですか。

記者 A (Cに)當り前さ。

主人 いや、誠に恥づかしいが、伊太利語は讀めるのと、少し話せるだけで、文章は書けないのです。論文は佛蘭西語で書きました。

記者 A 「神曲」の一小部分だと仰しやいましたが、いづれ何か特殊の御研究をなすつたのでせう。今まで外國にもないやうな。

主人 さあ、それは分かりません。書いたのは、プルガトリオの最後の六曲の研究です。第二十八曲から第三十三曲までですね。一部の批評家には、寧ろダンテの失敗だと言はれてゐる部分です。ダンテが地上樂園へはひると、不思議な行列を見ますね。普通、寺院の勝利を象徴するものだと言はれてゐるあの美しい行列です。行列が留まると、天の使が花を散らします。その花の中からダンテの昔の戀人のベアトリーチェが現れて來ます。私の研究が、若し今までの學者のそれと違つてゐるとすれば、ダンテの見たこの幻影を、單

に詩人の空想として取り扱はなかつた點でせう。私はダンテの優れた感覺を論じて、これを實際に見たキジョンとして取り扱つたのです。中世紀のコルプス・クリスチ。基督の死骸を祭る行列です。これとの關係を論じた人は澤山あります。寺院の勝利のアレゴリイとして論じた人も澤山あります。併し、私はさういつた考古的な研究には一切はひらずに唯ダンテといふ優すぐれて心の清い詩人と心靈界との密接な交通を説いたのです。ダンテが人間の目で實際に見た幻影として論じたのです。

記者C　どうか一寸お待ち下さい。少しおづかしくて、私にはよく分かりません。(Aに)君には分るか。一番初めのプル何とかいふのは何の事だ。

記者A　(Cに)「神曲」は地獄と煉獄と天國とに分かれてゐるんだ。プルガトリオといふのは、その煉獄だ。つまり罪の淨められる處だ。(主人に)さうですなえ。先生。

主人　さうです。さうです。

記者C　(Aに)君は文藝記者だけあつて、なかなか通つうだねえ。大使館といふので、よし來たとばかり引き受けて來たんだが、政治記者にはこいつは無理だよ。まあ、よく書いといてくれ給へ。あとで摘要させて貰ふから。

記者B　(主人に)一體、先生のふだん研究してゐらつしやる事は何なんです。

主人　普通の人の目に見えない世界。この世を離れた世界。この世を第一の世界とすれば、第二の世界の研究をしてゐるのです。

記者C ああ、「死後は如何」といつたやうな事ですな。(Aに)少し分かつて来たぞ。

記者B すると、心霊學といふやうなものですか。

主人 それもその一部分です。併し、私のはもつと廣いのです。實を言ふと、研究してゐると言ふよりは、さういつた世界に生きてゐると言つた方が好いのです。

(島村、客に茶を持って来る。)

主人 そこへ参つた青年ですが、これなども、諸君には唯の書生に見えませうが、普通人の持つてゐない感覺を持つてゐる人間です。吾々の見ないものを見るのです。吾々の聞かないものを聞くのです。

記者C 幽霊などを見るのですか。

主人 幽霊も見ます。生靈いきりやうも見ます。神も見れば、惡魔も見るのです。そして、さういふ者と話をします。(島村に)敏子はどうした。

島村 ゐらつしやいません。

主人 鳥小屋か。

島村 分かりません。

主人 何處かにゐたら、ここへ來いと言つてくれ。

(島村、去る。)

記者C お子さんはお嬢さんお一人ですか。

主人 さうです。

記者B お名前は。

主人 敏子です。ビンの字を書きます。

記者A 失禮ですが、奥様は。

主人 あれを生むと、間もなく亡くなりました。

記者A 先生が今日のやうな生活をなさるやうになつたのには、或深い動機があつたやうに承つてをりますが、それを伺ふわけには参りますまいか。

主人 それはもう過ぎ去つた事です。二十年も前の事です。今日では唯これが習慣になつてゐるだけです。習慣を變へるといふ事が恐ろしいので、唯かうやつて同じ生活を續けてゐるのです。

記者A さうお逃げになれば、ちと立ち入つて伺ひますが、失戀が動機だといふのは事實ですか。二十年前の先生は熱烈な戀愛詩人でした。その詩は今でも青年の間に愛誦されてゐます。その燃えるやうな戀愛詩人が急に隔絶した枯淡こたんな學究になられたのには、蔭に女性があ

るのだといふ事を聞きました。

主人 (笑) さうかも知れません。

記者C これは面白い。

主人 だが、もし失戀だとすれば、餘程不思議な失戀です。

記者A ダンテとベアトリチェのやうなのですか。

主人 どうして、どうして。ダンテの場合では、戀人が神です。戀人に挨拶をされるのは、神に挨拶をされる事です。私のはもつと低い、ずっと低い地上の戀でした。

記者B 古い事なら好いでせう。この際、その方面の事を續き物にして書かして頂くと、うちの社長は喜びますがな。

主人 それはだめです。それは私自身にもいまだに分からないでゐる事です。話したところでとても人に分かる事ではありません。決して私は逃げるのでも、ごまかすのでもない。

記者A では、それが動機だつた事は事實ですね。

主人 兎に角、その事から、私は戦ふといふ事の出来ない人間になつたのです。退いて守るといふ人間になりました。何か他の事を聞いて下さい。

記者B どうも、併し、惜しい種だなあ。

記者C その女性といふのは、お亡くなりになつた奥さんですか。

記者 B (Cに) ばか。奥さんに失戀する奴があるか。

記者 C あるとも、あるともさ、ねえ、先生、ありますね。

主人 意味によつては、ないとも言へますまい。併し、私の場合はそれではありません。妻は無情ではありませんでした。

記者 A その不思議な戀愛問題といふのは、奥さんをお貫ひになる前の事だぜう。

主人 さうです。さうです。だが、もうその話はよさうではありませんか。開く事があるなら、他の事を聞いて下さい。

(間。)

記者 C ところで。では、伺ひますが、先生は何で生活してゐらつしやるのです。失禮ですが。

主人 さつき御覧になつたでせう。鶏を飼つて生活してゐます。

記者 B 御自分でおやりになるのですか。

主人 自分でもやります。娘にも手傳はせます。書生にも手傳はせます。

記者 C 學問上での御収入は全くないのですか。

主人 時々外國から原稿料を貰ひます。でも、それは一年に一度か二度です。私は學問で金を取らうとは思ひません。私は卵屋としての外、社會との接觸を避けてゐるのです。避け

てゐるのではない。私には世間で言ふ現實の世界が幻影で、世間で言ふ幻影の世界が現實なのです。私は自分にとつての現實の世界に生きてゐるのです。唯それだけです。

記者C 又むづかしくなつて來ましたね。(他の記者達に) どうだい、諸君。あんまりお邪魔をしても何だから。

記者B (Cに) 一寸待つてくれ給へ。(主人に) お宅は大層變つた建築ですが、これは先生が御考案になつたのですか。

記者A さう、さう。僕もそれを伺ひたいと思つてゐたのだ。

主人 私が考へて建てたのです。舟か何かのやうでせう。

記者A ノアの箱舟といったわけですか。

主人 さういふ寓意ぐういがある譯でもないのです。唯必要だけのものを必要な位置に置いたのです。

記者B あの玄關の上に塔のやうに突き出してゐる處は何ですか。

主人 私の書齋です。その階子段はしごだんから行けるやうになつてゐます。二階を自分の必要なだけの廣さにしたので、ひとりでに塔のやうになつたのです。

記者C あすこから世間を見てゐるのですね。

主人 いや、あの部屋には息抜きの穴があるだけで、窓はありません。世間に對しては全く盲目まうもくな書齋です。

記者C 明かりを入れる窓もないのですか。

主人 ありません。晝でも蠟燭をつけるのです。

記者C (Dに)君、フラッシュを持って来たか。

記者D 持って来なかった。

記者C 残念だなあ。そこで寫眞をとらして貰へると好かつたんだが。

主人 寫眞をとるんですか。

記者C どうか一つ。お嬢さんも一緒に願へないのですか。

主人 (呼ぶ) 島村、島村。

(島村、登場。)

主人 敏子はどうした。

島村 お歸りになりました。

主人 お歸りに。何處へ行つてゐたのだ。

島村 知りません。

主人 好いから、呼んで来い、

(島村、退場。)



(記者D、寫眞機を持つて、好い位置を探す。)

(敏子、島村、登場。)

敏子 お父さん、お歸りなさいまし。

(敏子、記者達に禮をする。)

(記者達も禮を返す。)

主人 (記者Dに) この儘で宜しいか。

記者D 宜しうございます。(敏子に) お嬢さん。どうぞお父様の側にお立ち遊ばして。

(敏子、父の側へ行く。)

主人 (島村に) お前もはひれ。

島村 僕は。

主人 はひれ、はひれ、(記者Cに) 入れても好いのでせう。

記者C どうぞ。

主人 (島村に) さあ、お出で。

(島村も主人の側に立つ。)

記者 D 少し暗うございますからタイムでやります。はい、一、二、三。は、宜しうございます。

記者 A では、これで失禮いたします。

記者 B 有難うございました。

記者 C 失禮。お嬢さん、さやうなら。

主人 寫眞が出来たら、一枚送って下さい。

記者 D 畏かしこまりりました。直ぐお送りします。

(四人、退場。)

主人 (島村に) 爲事着を持って来てくれ。

島村 はい。

(島村、二階へ上がる。)

主人 敏子、何處へ行つてゐた。

敏子 お父さん、けふはおめでたうございます。

主人 有難う。お前どこへ行つてゐたのだ。

敏子 萬松軒まで夜のパンを取りに行つたのです。

主人 ああ、さうか。

(島村、階段の上に姿を現す。)

島村 スボンもですか。

主人 上着だけで好い。

(島村、上着だけ持つて、降り来る。)

(主人、上着を著換へる。)

(敏子、フロックコートを始末する。)

敏子 お父さん。

主人 うむ。

敏子 どうして新聞記者などにお會ひになつたの。

主人 どうしてだか分からない。けふは誰にでも會ひたいやうな氣がするのだ。

島村 僕は何だか恐ろしくなりました。

主人 なぜ。

島村 先生が急に變つた事をなさるのが恐ろしいのです。

敏子 大使館で何か好い事でもあつたんですか。

主人 本國から來た金をくれたのだ。俺の研究を獎勵しょうらいする意味で。たいした額ではない。鳥の

世話おこたを怠る事の出来る程の金ではない。

島村 先生、僕は今まで餘り極端に世間と隔絶した先生の生活を否定してゐました。少しは世間へお出になる方が好いと思つてゐました。併し、あの新聞記者がぞろぞろはひつて來たのを見た瞬間急に何だか恐ろしくなつて來ました。先生の急にそんな事をなさるのが、或破滅まへぶれを前觸するやうに思はれました。

主人 大丈夫だ。大丈夫だ。俺は決してこの小さな世界を捨てはしない。世間に俺を誘惑し得るものは何もない。

島村 みんなが、ばらばらになるのではないでせうか。僕は恐ろしくなりません。

主人 お前の感覺は鋭敏過ぎるのだ。大丈夫だ。大丈夫だ。

島村

先生、お願いですから、けふはもう誰が訪ねて来ても、會はないで下さい。

主人

成程、俺はけふ、この二十年間、一度も觸れなかつた世間といふものに觸れた。併し、それはさつき四人の新聞記者に會つた事で、もう帳消になつてゐる。あれが何萬枚かの新聞になつて日本中の人に觸れるのだ。それでもう貸借なしだ。一度に義務を果したのだ。俺は一瞬間第一の世界に觸れただけで、又第二の世界へ歸るのだ。お前は鶏に餌ゑさをやれ。敏子は語學の復習をしろ。俺は書齋へ歸る。

(主人、二階へ上がりかける。)

(人の音なふ聲。)

(三人凝立する。)

(間。)

主人

(島村に) 行つて見ろ。

(島村、退場。)

(間。)

(島村、登場。)

島村 (敏子を見て、それから主人に) 谷村といふ方が見えました。  
主人 谷村。男か、女か。  
島村 男の方と女の方です。御夫婦でせう。

(間。)

島村 断りませうか。

主人 (階段を降りる) いや、通せ。

島村 玄関からですか。

主人 さうだ。玄関から。

(島村、玄関の方へ行く。)

主人 敏子、暫くあつちへ行つてみてくれ。

敏子 お父さん。

主人 何だ。

敏子  
いえ。

(敏子、退場。)

(島村に案内されて、谷村夫婦登場。)

主人  
島村、あつちへ行つてをれ。

(島村、退場。)

(間。)

谷村  
お祝ひに來た。

主人  
何の。

谷村  
けふの名譽の。

主人  
さうか。それは有難う。

(三人、腰かける。)

(間。)

谷村 暫くだった。

主人 暫くたった。

糸子 (口だけ動かす)

谷村 よく會つてくれた。とても會つてはくれまいと思つて來たのだ。

主人 ほんとに會ふまいと思へば、來る筈がなかつたのだ。ことに依ると會ふだらうといふ豫想を持つて來たのだらう。

谷村 如何にもさうだ。けふを外してはだめだと思つたのだ。君はけふ世界的の名譽を得たさうだ。おめでたう。

主人 たいした事ではない。唯、外國から金を貰つたのだ。

谷村 實は僕も金を少し持つて來たのだが、受けてくれるか。

主人 何の爲に。

谷村 君の研究の爲に。無遠慮に、君の生活の爲にと言つても好い。

主人 受けても好い。だが、二十年も音信不通だった君が、どうして急にそんな氣になつたのだ。

谷村 改めて友達になつて貰ひに來たのだ。

主人 君は昔から友達だ。そして、ずっと今まで友達だ。



谷村 ほんとにさうか。

主人 ほんとにさうだ。僕は君に對して少しでも悪意を持った事はない。

谷村 ほんとにさうか。

主人 ほんとにさうだ。

谷村 それを聞いて安心した。君の性質を知つて僕が、それ以上の事を言ふのは、君の感情を傷つける事になるかも知れないが、實はけふは、（糸子を見る）妻に代つてあやまりに來たのだ。

主人 あやまりに。（糸子を見る）何をあやまりに。

谷村 二十年前の誤解を。妻は全く君を誤解してゐたのだ。

主人 それは分からない。人間が誤解だと思つても、屢しばしばそれが正しい解釋である場合がある。人間の事は分からない。僕はそんな事を詫びられる覚えはない。

谷村 妻だけの事なら好い。僕と妻との關係だ。

主人 それは聞いたつて爲方がない。僕には永遠の謎だ。君自身にだつて、分かる筈はないのだ。

谷村 さう言はれると辛いつらよ。その辛さが僕を鞭むちうつて、僕を鐵面皮にして、ここへよこしたのだ。僕はこの二十年間、誰にも理解されない心苦しい生活をして來たのだ。どうかして、一度君の諒解りやうを得なければ、死ぬにも死にきれないのだ。

主人 君は忙しい世間の渦の中に生きてゐるのだ。そんな事を考へてゐる暇はあるまい。僕でさへもう忘れてゐる事だ。

谷村 いや、それは違ふ。如何にも僕は忙しい生活をしてゐる。金錢の渦の中に巻き込まれてゐる。併し、青春時代に感じた事は魂の底にこびりついてゐて、容易に消えるものではない、僕と妻と顔を合す度に、一日だつて、あの當時の事を思ひ出さない日はない。

主人 それは氣の毒な事をした。僕は今が今まで、自分といふものが、君達二人の幸福の上にはさす暗い影になつてゐようとは夢にも思はなかつた。これは僕の方が、あやまらなければならなさうだ。

谷村 さう言はれると、僕は愈いよいよ辛い。君と君の細君との間のうまく行かなかつた事もその當時聞いて知つてゐた。細君の亡くなつたのを聞いた時、僕はもう堪らなくなつて家を飛び出したのだが、君の家の門口まで来て、たうとうはひれずに歸つてしまつたのだ。

主人 妻の問題は僕に罪がある。少しの愛の基礎もなしに結婚したのが悪かつたのだ。意志で愛さうとしたのだが、相手が意志だけでは満足しなかつたのだ。無理のない事だ。僕は唯君達二人に一刻も早く安心がさせたいばかりに結婚したのだ。餘りに機械的な結婚だつた。手段に走り過ぎた結婚だつた。

谷村 それも聞いて知つてゐる。そして、今でも二人で感謝してゐる。

主人 僕のした事は失敗に終つたが、君達二人に對する僕の心持はそこにある。今でも依然と

してそこにある。併し、當時の僕の心持には、不純なところがあつた。虚榮があつた。犠牲といふ假面をかぶつた反抗があつた。ほんとの、ほんとの愛ではなかつた。だから、自分の妻をも心から愛す事が出来なかつたのだ。神は妬みねた深い。神は僕のその不純な愛を責めてやまなかつた。神が妻を通して、僕を責め抜いたのだ。愚な僕はそれに気がつかなかつた。僕は自分を犠牲にしないで、妻を犠牲にしてしまつたのだ。僕はたうとう神を殺してしまつたのだ。この罪は永遠に許されまい。僕は地獄の第七獄に墮おちるのだ。

谷村

それもこれも、僕等二人の爲だ。何より苦しい事は、（系子を見る）この人と君との關係を忠告したのが僕だ。君にこの人を思ひ切らせたのが僕なのだ。

主人

だが、それは君が僕の親友として、實際僕の爲によくない事だと思つたから、忠告してくれたのだ。僕は少しも自分を愛してゐない女の爲に、命をかけてまで悶えてゐたのだ。それを君がはつきり僕に見せてくれたのだ。慈愛の鞭は痛い。眞實をまともに見せられれば目が眩む。併し君の愛に満ちたメスは、終に醜つひ惡な僕の腫物を切り捨ててくれた。僕は涙を流して「諦める」と言つた。あの涙に一點不純な分子はなかつた。あの涙は恐らく僕の一生の内にもう二度と見る事の出来ない清い涙だつた。

谷村

それもそうだ。僕もあの時は、君を思ふ以外に何もなかつたのだ。唯どうかして君が救ひたかつたのだ。君を亡びに會はせたくなかつたのだ。第一僕は、（系子を見る）この人をまだ知らなかつたのだ。

主人 神祕はそれからだ。

谷村 この人を知つたのは、君が僕の忠告を入れてくれてから、その跡始末をする時だった。

僕は幾度かこの人と會つてゐる内に、どつちから近づくともなく近づいてしまつたのだ。僕にもそれは分からなかつた。たつた今自分の親友を諦めさせた女に、今度は自分が近づいて行く。そんな事が、僕の性格として、唯普通に出來るわけがないのだ。

主人 人間の事は人間の力ではどうもならないのだ。

谷村 全く天意だ。少なくとも天意だと僕は思つた。君に對して愛のない女、それは君にとつて他人だとも思つた。そして、たうとう一緒になつた。この氣持は、きつと君には分かる。いつか分からずには置くまいと思つた。

主人 神祕だ。神祕だ。

谷村 ところが、結婚後三ヶ月程立つた時、この人は始めて眞實を打ち明けた。(間)この人はやつぱり君を愛してゐたのだ。(間)そして、あの當時の君の狂態にあやまられて、君が自分を愛してゐないと思つたのだ。(間)まるで反對だった。

主人 (沈黙)

谷村 しかし、この人は僕にその事を告白して、僕に自分の代りにあやまつて來てくれと言ふのだ。妻に罪はない。勿論、君にも罪はない。恐らく僕にも罪はあるまい。總てが間違ひだ。みんな、みんな間違へてゐたのだ。だが、僕は苦しんだ。この二十年間苦しみ通しに

苦しんだ。どうしても君の所へ来る事が出来なかつた。

主人

それは氣の毒だつた。ほんとに氣の毒だつた。君は「狂態」といふ詞を使ったが、あの當時の僕は全く氣違ひだつた。あの氣違ひが、總てを混亂に陥れたのだ。併し、もう總ては過ぎ去つた。僕は案外今落ちついてゐる。平和だ。寂しいとも思はない。娘も僕を愛してくれてゐる。今ゐた青年も、僕を父のやうに慕つてくれてゐる。僕には僕の世界がある。鳥小屋がある。書齋がある。君は餘り過去を重んじ過ぎた。

谷村

有難う。僕はやつと重荷をおろしたやうな氣持がする。僕は君に面罵されるつもりで來たのだ。命を賭けても好いと思つて來たのだ。ああ、やつと落ちついた。(系子を見る) おれ一人でしゃべつてしまつた。お前もう言ふ事はないか。

(系子、頭を振る。)

谷村

(主人に)では、これにも一言許すと言つてやつてくれ給へ。

主人

(系子に)許すも許さんもありません。總ては神の意志です。

谷村

有難う。有難う。ところで、お嬢さんに會はせてくれないか。

主人

會はせよう。(呼ぶ) 島村、島村。

(島村、登場。)

主人 お嬢さんをお呼んで来い。

(島村、黙って立つてゐる。)

主人 何をぼんやりしてゐるのだ。直ぐ呼んで来い。

島村 はい。

(島村、退場。)

谷村 あれだね。あれはどういふ人の子だ。

主人 孤兒だ。父親が死んでから生れた子だ。生れると直ぐ母親が自殺したのだ。  
谷村 どうして。

主人 再婚を強<sup>し</sup>ひられたからだ。

谷村 可哀さうに。

(敏子、登場。)

谷村 ああ、お嬢さんですか。敏子さんですね。私は父さんの古い友達、谷村です。(糸子を紹介して)これは妻です。

(敏子、黙禮する。)

(谷村、糸子を見る。)

(糸子、頷く。)

谷村 (主人に)ところで、山中君。甚だ突然だが、再び昔の友誼いづきを取戻すしるしに、このお嬢さんを僕の家へ貰ひたいと思ふが、どうだ。

主人 (間)これを。

谷村 (間)實は理由なしではないのだ。僕等夫婦の間に一人息子がある。大學へ行つてゐるのだ。その嫁として貰ひたいのだ。

主人 だが、これはまだ。

谷村 天意は測るべからずだ。實を言ふと、僕の息子と君のお嬢さんとの間に、戀が成り立つてゐるのだ。二人は親と親との關係を全く知らずに愛し合つたのだ。

主人 　　いつ。どこで。

谷村 　　學校へ通ふ道で。

主人 　　え。敏子。それはほんとか。

敏子 　　ほんとです。

主人 　　ほんとか。

敏子 　　ええ。

主人 　　さうか。

谷村 　　（主人に）どうだ、君。二人を幸福にしてやらうぢやないか。僕等のやうな間違ひの起らない内に。君が僕等に悪感を持つてゐない證據にもなるのだから。

主人 　　（間）娘に聞いてくれ給へ。

谷村 　　敏子さん、来てくれますか。

敏子 　　ええ。

谷村 　　厭なら厭と言ふのですよ。

敏子 　　参ります。参ります。

谷村 　　どうだい、山中君。

主人 　　總ては娘の意志だ。（間）僕に異存はない。

谷村 　　ああ、それでやつと安心した。君の温い心も、これで本當に分かつた。感謝する。



主人 　いつから連れて行くのだ。

谷村 　今からでも好い。だが、したくもあらう。いずれ僕が又迎ひに来る。

（主人、黙つてゐる。）

谷村 　では、けふはこれで歸る。

（系子、谷村の顔を見る。）

谷村 　おう、さうだ。これを。

（谷村、懐から金包を出す。）

（主人、その方を見ない。）

敏子 　（主人に）お父さん、ステエションまでお送りしてもよかつて。

（主人、黙つて頷く。）

敏子　では、一寸お待ち遊ばして。

（敏子、退場。）

主人　（谷村に）過去の事は決して娘に言つてくれ給ふなよ。

谷村　勿論の事だ。

主人　世の中の事はどうなるか分からないものだ。僕の第六感も餘程怪しいものだ。（低く笑ふ）

（敏子、登場。）

敏子　では。

谷村　では、山中君。

主人　さやうなら。

（系子、主人に黙禮する。）

（三人、去る。）

(島村、ぼんやりとはひつて来る。)

主人 敏子は今の人のところへ行くことになった。

島村 聞きました。

主人 だが、お前はやつぱりここにゐてくれるだらうな。

島村 僕ももうお暇ひまを頂かうと思ひます。

主人 どうして。

島村 お嬢さんがお出でにならないでは。

主人 お前は敏子を愛してゐたのだらう。

島村 はい。

主人 だが、敏子はお前を愛してゐなかつたのだ。

島村 それは分りません。

主人 成程、それは分らない。併し、今はどうする事も出来ないのだ。

島村 ですから、僕はここを離れたいのです。

主人 ここを出て、何處へ行くのだ。

島村 それも分りません。僕は唯世間へ出て行かうと思ひます。先生の世界は餘りに脆もろいものでした。世間に一度觸れると、直ぐに毀これてしまひました。先生はこれでもまだ、先生の

世界を幸福だと思つてゐるのですか。この卵のやうに脆い世界を。先生の世界も、もう絶望ですね。

主人

いや、俺はやつと俺の行きつく處へ來たのだ。(側にある書物を取り上げる)ここに露<sup>ロ</sup>西<sup>シ</sup>ア<sup>ア</sup>の人の書いた詞がある。(譯しながら讀む)「絶望は人生に於ける崇高な瞬間だ。そこへ來るまでは、吾々はまだ何かに助けられてゐるのだ。吾々は今始めて吾々自身になつた。前には、吾々は人間や人間の律おきてと關係があつた。今、吾々と關係のあるのは、もう永遠だけだ。吾々は律といふものと完全に手を切る事が出來たのだ。」

島村

それは負け惜しみです。(行をかける)

主人

これからだ。俺の本當の生活はこれからだ。

(主人、燭臺に火をとぼす。)

(島村、黙つて、行つてしまふ。)

(主人、二階へ上がる。)

(舞臺暫く空虚。)

(鶏二三羽、こつこつと音をさせてはひつて來る。)

——幕——

(大正十年十二月「新演藝」)

底本 日本現代文学全集 34 (岡本綺堂・小山内薫・真山青果集)

著者 伊藤整 等編

出版者 講談社

出版年月日 1968